

現代美術館の収集アーカイブズに関する構造分析

— 横尾忠則現代美術館の事例 —

井 上 佳那子

【要 旨】

本稿では、横尾忠則現代美術館（以下、横尾館）で保管している横尾忠則のアーカイブズ資料群を事例に、現代美術に関連する収集アーカイブズの構造分析を試み、資料群の特性を反映した編成記述と公開方法について検討する。

横尾忠則（1936-）は精力的に活動を続ける現代アーティストである。グラフィックデザイナーからキャリアをスタートさせたが、画家や文筆家といったジャンルに囚われない幅広い創作活動を展開しており、制作に伴って発生する資料は、形態、素材、用途など多岐にわたり、現在も増え続けている。発生した資料は不定期に横尾館に移管されるが、移管後も、当該資料群は横尾にとって「現用資料」であり、場合によっては横尾の手元に返還され、そのまま複数の制作物に繰り返し引用されることで発生から時間を経て多数のコンテキストが付与されることがある。

横尾館は2012年の開館以来、増え続ける当該資料群の調査・整理を継続して行っており、移管される資料に合わせて整理方法を更新している。調査が完了した資料については、展覧会での活用と、可能な範囲での情報公開を行っているが、資料群の全体像は把握できておらず、資料群の構造分析及び階層構造の設定までには至っていない。将来的に当該資料群の収集および構造分析が完了した際には、編成記述を反映しつつ、現代美術館の収集アーカイブズとして広く活用されるための公開方法を検討する必要がある。

【目 次】

はじめに

1. 現在の課題
2. 横尾忠則アーカイブズの構造分析
 - (1) 概要目録と ISAD(G) 項目の照合・整理
 - (2) 横尾館の「原秩序」と「出所」
 - (3) 階層構造の編成記述
3. 多角的検索手段の整備に向けた試論
 - (1) タグ・システムを応用した検索システムの検討
 - (2) 現代美術館におけるアーカイブズ資料の展望

おわりに

はじめに

横尾忠則現代美術館（以下、横尾館）は、兵庫県が芸術家・横尾忠則より作品と資料の寄贈・寄託を受けたことを契機に設立された、県立の個人美術館である。資料の保存管理および調査・研究のために専用のアーカイブ・ルームが設けられ、事前予約制だが職員付き添いのもとアーカイブ・ルーム内で資料を閲覧することができる。閲覧可能な資料は、当館HPにて「整理済みアーカイブ資料リスト」として一覧を公開しており、年度毎に調査進捗を反映させたものに更新している。利用者には、利用申込の際にこのリストから閲覧希望資料を選択・指定してもらう手順となっている。館とアーカイブ資料受入に関する概要および特徴については、筆者の前任である奥野雅子氏の論文に詳しい¹⁾。

横尾は85歳になった現在でも意欲的な創作活動を続けており、活動に伴って資料は発生し続けている。自宅およびアトリエにはまだ多くのアーカイブ資料（に該当するもの）が残されていると考えられるが、その数や内容は未知数である。横尾館にはその一部が不定期に搬入されるが、現在進行形で展開する横尾の制作は横尾館のアーカイブズにとっても大きな影響を及ぼしている。当アーカイブズ内の資料は横尾にとっては「現用文書」であることから、調査・登録が完了した資料でも要請を受ければ返却する必要がある。横尾の手元に戻った資料は、新たな作品に流用され、別のコンテキストを付与されることもある。本稿では、2021（令和3）年10月現在、横尾館で管理している収集アーカイブズの内、主に横尾事務所とアトリエから移管された資料群を「アーカイブズ」または「アーカイブ資料」として扱うこととし、アーカイブズ学においては個人文書に該当する本資料群に対して、現段階で想定し得る構造分析と階層構造の編成を試み、「記録資料に対するアクセシビリティを高めるため」²⁾の方法を検討する。

1. 現在の課題

前節でも述べたように、当アーカイブズの特徴として、収集が完了していない点と、移管後に「現用文書」として再度利用される場合があるという点があげられる。当館において、現状移管されている資料群は、役割を完了した「非現用文書」として調査・整理が進められているが、横尾の中では現用／非現用の区分は意識されることはなく、おそらく非常にプライベートな理由（気に入っている、思い出がある等）から手元に残すものと移管資料を選別していると推測される。これらの資料は使用されなくなったために当館に移管されているとは限らず、また、移管時に非現用であった資料でも、その後の制作に必要とされれば、横尾の手元に戻り現用文書となる可能性もある。横尾の創作活動が続く間は、確実に非現用となった資料と、現用に戻れる可能性がある資料を第三者が選定することは困難である。

1) 奥野雅子「美術館における作家資料の保存・公開—横尾忠則現代美術館アーカイブルームの現状と課題」『兵庫県立美術館研究紀要』第13号、兵庫県立美術館、2019年、p.46-53。「本論文は、国文学研究資料館『平成29年度アーカイブズ・カレッジ（短期コース）』修了論文を加筆・修正し掲載された」（本論註（2）より抜粋）。

2) 柳沢美美子「国際標準記録史料記述の一般原則：ISAD（G）と方法としてのコンテキスト—目録記述の目的と方法—」『福井県文書館研究紀要』1、福井県文書館、2004年、p.67。

不定期に資料が増減することを踏まえて、当アーカイブズでは階層構造の編成は行っておらず、移管済みの資料群についても全体像を公開するには至っていないが、膨大な資料の「群」としての全容を示すことは将来的な課題の一つである。階層構造の設定の難しさについては、藤本貴子氏が論じているように³⁾、当アーカイブズでも類似した課題を抱えている。現地調査の困難さも加わり、将来的に移管されると思われる資料を含めた最終的な資料群全体の把握についても、見通しが立たない状況であることから、本稿では当館に移管済みの資料のみを「非現用文書」として扱い、各項の検討を試みる。

また、整理済みの資料に関する記述統制について、横尾館では、アイテム単位のデータベース（内容目録）と、館内用のファイル（箱）単位のデータベース（概要目録）を作成しているが、内容目録の項目は兵庫県立美術館 美術情報センターのデータベースを基盤として構築されたため、主に書籍を想定した項目が設定されており、国際的な標準記述である国際文書館評議会が定めた国際標準記録史料記述第2版（以下、ISAD(G)）への準拠など、アーカイブズ学的な側面からは検討されてこなかった。

こうした状況の中、横尾館では2012年の開館以来、移管された資料の段階的な調査・整理を継続して行ってきた。作業手順については館内で独自の作業マニュアルを策定し、①一次調査（概要調査）、②二次調査（アイテムレベルの詳細調査）、③三次調査（展覧会出品等に伴う状態調査）の順で調査を進めており、①の調査終了後に概要目録を、②の調査終了後に内容目録をそれぞれ作成している。前述したHPで公開している「整理済みアーカイブ資料リスト」は、内容目録の項目を一部抜粋したものであり、現在では3775件（非公開資料は除く）の情報を公開している。迅速な情報公開に努めるため、階層構造の編成は待たずに、アイテム単位の内容目録作成と公開が先行している状態である⁴⁾。将来的には内容目録だけでなく、概要目録や階層構造の公開についても検討の余地があると思われる。

また、これまでは、ドローイング、原画などの作品に近い位置づけの資料や、60年代・70年代の比較的古い資料の調査が優先的に進められてきたことから、原稿資料類に関しては、②の調査およびデータベース登録が完了しているものが多い一方、掲載誌や装幀関連資料など、検索・利用頻度の低い資料に関しては、①の段階で調査保留となっているものや未調査資料も少なくない。このため、内容目録作成前の資料を取り出すためには、概要調査の画像を遡って実際の箱を確認する必要があると、検索性と作業効率は低い状態である。

館の業務内容の変化とともにアーカイブ資料の利活用が活性化ようになってきたことから、概要目録を利用する機会が増えてきたため、本稿ではISAD(G)の26項目にマッピングする形で、改めて概要目録の項目を整理し、資料群全体を概観した上で階層構造の検討を行う。

なお、以下で検討する項目の追加および整理、記述の修正、資料区分の変更等は、本稿のために仮説的に行うものであり、実務レベルで反映する段階には至っていない。

3) 藤本貴子「近現代建築資料の編成記述—大高正人建築設計資料群を事例に」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第16号、国文学研究資料館、2020年、p.69-70。

4) 奥野前掲論文、p.50。

2. 横尾忠則アーカイブズの構造分析

(1) 概要目録とISAD(G)項目の照合・整理

館内用の概要目録は、搬入時のファイル(箱)単位での情報を集約している。横尾館では収蔵管理システムとして「File Maker Pro」を使用しており、全30項目が設定されている。今回ISAD(G)における26項目のうち、必須項目とされている6項目(レファレンスコード、タイトル、作成者、年月日、数量、記述レベル)を中心に概要目録の項目を精査し、照合を行った。

表1が各項目の対照表で、参考までに現行の内容目録も併記した。それぞれの目録で項目の名称が異なっているが、複数の職員が目録の作成に携わることから、いずれの名称も平易であるように意識されている。6項目のうち、「作成者」は著名がある場合などを除いて特定困難なものが多く、出版物などを含めると定義が広範に及ぶため本稿では除外した。また、「3.7 記述制御の領域」についても除外項目ではあるが、現状では内容目録に「最終更新日」が設けられているのみで該当する項目はない。今後概要目録作成において、アーカイブ担当以外の職員が参加する可能性もあるため、「3.7.1 記録史料管理者の注記」の項目追加を検討したい。

表1 各目録とISAD(G)項目の対照表

追加項目

エリア	要素	概要目録	内容目録(一部抜粋)
3.1 固有性宣言の領域：個別情報のエリア	3.1.1 参照記号：レファレンス・コード	—	管理番号
	3.1.2 標題	箱番号	タイトル
	3.1.3 年代	資料年代	出版年_年(制作年)
	3.1.4 記述レベル	記述レベル	記述レベル
	3.1.5 記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)	形状(箱) 資料種別 形態 数量・冊数	— 資料区分 形態 数量
3.3 内容と構造の領域	3.3.1 範囲と内容	内容・備考	資料概要
3.4 利用可能性[／公開]と利用の状況の領域	3.4.1 利用可能性[／公開]を規定[／統制]する条件	整理状況	公開区分
	3.4.4 物的特徴と技術的要件	資料状態	資料状態
3.6 備考の領域	3.6.1 備考	内容・備考	備考
		現保管場所	収蔵場所
		棚番号	—

すでに調査済みの箱に関しては今後撮影画像から情報を抽出するが、本稿の階層構造検討のために、現在取得されているメタデータを基にして目録の記述を試験的に整理した。表2はその一部を抜粋したものである。現行の目録では、資料年代が「内容・備考」欄のみに記載されている、内容に言及しているもの／していないものが混在しているなど、記述の統制がとれていない部分がある。なお、「資料状態」欄には、搬入時の状況・当館での取扱い・移管経緯など、来歴に該当する内容を含む場合があるが、内容的に結びついていることが多いため一つに統合している。

資料の分類やカテゴリについては「資料種別」に大別し、今回新たに「形態」の項目を追加した。「資料種別」は、内容目録上の5つの「資料区分」に該当するが、「形態」は物理的分類に基づく区分である。内容的に重複する部分もあるが、現状の区分は職員にとって馴染みがあるため、「資料種別」の項目も残すこととした。また、「内容・備考」の記述は、調査段階で

取得したキーワードの箇条書きとなっているが、あくまで館内用のインベントリーであるため、学芸員が業務に使用する用途としては役割を果たしている。「資料年代」は必ずしも制作年代とは限らず、「内容・備考」に列挙された作品名やプロジェクト名に関連する年代を抽出したものである。

表2 概要目録項目（変更案）（一部抜粋）

追加項目／表記の追加・修正

箱番号	現保管場所	棚番号	形状(箱)	整理状況	資料年代	資料種別	記述レベル
0642	アーカイブルーム	BL-3-3	ストレージボックス・大	一次調査済	1970～90年代	原稿	ファイル
0651	アーカイブルーム	DR前	ダンボール	検索システム登録済	2010年代	その他	ファイル

形態	資料状態	数量・冊数	内容・備考
紙資料、紙焼き写真、封筒、トレーシングペーパー、シートフィルム、カラーチップ	旧箱0416 2/3	—	【原画】1970年代～90年代デザイン原画・校正原稿・デザイン下絵等(ビートルズ、X'mas Paradise、クリスマス・パラダイス、Amazon、アマゾン、黒蜥蜴、ヘンリー・ミラー、中村メイコ、新世界のビート、西武ボスター (TOTAL GRAPH-T.Y. ?)、唐十郎 愛のリサイタル、少年マガジン、Rado、Issey Miyake、イッセイミヤケ、Nagoya演劇祭、Greeting (はいづか印刷)、シマヤ、失われたボールをもとめて、Plains Feux sur le Japon, Paris 1987、TOTAL GRAPH-T.Y.、Milano: 5)
ジャケット、Tシャツ、シャツ、ニット帽、バック	2016.2.26ヨコオズ・サーカスより宅急便にて受領。ヨコオズ・サーカスへの確認用に簡易撮影にて管理番号付与済み	20	「YOKOO ALL STAR」「SCANDAL」「Y字路」シリーズ20点。

(2) 横尾館の「原秩序」と「出所」

紙面の都合上詳細は省略するが、上記のように概要目録を試験的に整理した上で、記述内容を階層設定に反映させることとしたが、階層構造モデルの検討に入る前に、横尾館における「原秩序」と「出所」の問題に触れておく。当アーカイブズでは、「原秩序」を「館に搬入された箱の中の状態（「現状」）」と捉えており、輸送時に発生した資料の変動や損傷も原秩序に含んでいる。これは、資料群が館藏品でないことに加えて、横尾の元に返却する場合があるため、横尾館での保存状態と輸送に際する損傷・状態変化とを区別する必要から生じた定義である。

また、年代や形態、機能を横断して再利用されることが多い横尾のアーカイブズ資料において、出所元での原秩序と、その復元が資料群の体系的構造を解明する手がかりになるとはいいい難いように思われる。例えば、外箱に「80～90年代 掲載誌」と表記されているものや、封筒に書籍名と「装丁・指定紙」などと表記されているものも多く、出版社など外部組織との関わりにおいては、資料の機能がある程度意識されていたと考えられるが、それぞれの資料が作成・使用されたあとの保管状態、つまり搬入用のダンボールに収納される前の状態（があるとすれば）を特定することは困難である。こうした状況を踏まえて、館搬入時における「原秩序」の画像記録は保持しているものの、そこに内的秩序は求めていない⁵⁾。また、同一の箱内

5) 柳沢前掲論文、p.67。柳沢氏は「「原秩序」が大きく破壊されているか、コレクションのように最初から存在しない場合には、資料群に構造を課すのは編成・整理者の仕事ではないだろう。その場合には資料群を調査した際の状態を維持するという意味で「現状」が、まず尊重されるべきだろう」と述べている。

で明らかに年代が順不同になっている／同一の資料が点在している場合などは、客観的基準に基づく整理として、記録をとった後の並び替えは許容されるものと判断している。

「出所」については、奥野氏が指摘しているとおり⁶⁾、「横尾作品・資料はプライベートとパブリックが地続きであるという特徴」があり、とくに事務所とアトリエの出所区分は不明瞭なものも多い。また、出版社や編集者との書簡や、印刷所から横尾に送られたと思われる印刷物についても、「作成者」が横尾でないことは明白だが正確な出所を特定することは困難であり、このことは横尾が受け取った手紙・葉書・ファンレターにも当てはまる。

(3) 階層構造の編成記述

上記を踏まえた上で、図1のとおり、サブ・フォンドを①「横尾忠則アトリエ」、②「株式会社ヨコオズ・サーカス (横尾事務所)」に大別した。②から搬入された資料については、概要目録の「内容・備考」欄に出所元情報を記載することで区別しており、現在、ファイル (箱) 単位で約40箱を保管している。ただし、前項で述べた通り、出所元を厳密に区分することは困難で、なかには「アトリエ→事務所→横尾館」というルートで輸送されたと思われる資料も少なくないため、②をサブ・サブ・フォンドとして①に加える選択肢もある。本稿では2つのサブ・フォンド案を採用し、①を出所元とする資料群を中心に考察する。

本節1項で、ISAD(G)に準拠した形で各目録の項目を整理したが、箱の内容物は年代・媒体・形態・機能などが混在しており、階層構造の中で箱 (保存単位) をファイルもしくはサブ (・サブ)・シリーズなどに設定すると、上位レベルに秩序を見出すのは困難になる。上述した「原秩序」の問題にも関連するが、同一の資料が別の箱に分かれて収納されていても、保存上の問題が生じている場合を除いて別の箱への入れ替えは行っておらず、現状では保管単位 (箱) を利用した編成は成立しないと考えられる。

本編成案では、シリーズとして①「制作物」、②「収集品」、③「未分類」を設定した。垣田みずき氏⁷⁾や藤本氏が試みているが、本稿でも社会に発表した仕事や創作活動の成果、その関連資料を「公的」な場との繋がりをもつものと定義し、横尾が作成に直接・間接的に関わったものを「制作物」とした。一方で、他者から受け取った資料や収集品を「私的」と仮定し、これに属するものを「収集品」に分類した。「私的」の中には、公的活動に属する制作と直結する資料も数多く含まれているが、資料発生の過程に明らかに横尾が関与していないもののみを「私的」と定義する。第三者が横尾にインスピレーションを受けて制作した資料など、精神的な影響は横尾の関与から除外する。また、後述するが、各資料の作成後の展開は別の文脈で付与される情報として、本稿の構造分析においては考慮しない。

シリーズ①「制作物」以下の構造を詳しくみていくが、現在、内容目録のデータベースでは「原稿」「装幀」「掲載誌」「図録」「その他」の5つの資料区分が設定されており、これらを i 「原稿」、ii 「掲載資料」、iii 「装幀」、iv 「日記」、v 「その他」に再編成し、「制作物」の下位に機能別のサブ・シリーズとして設定する。加えて、「掲載資料」「装幀」「その他」には、形態別のサブ・

6) 奥野前掲論文、p.50。

7) 垣田みずき「舞台芸術アーカイブズの編成記述に関する考察—慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイブを事例に—」『国文学研究資料館 アーカイブズ研究編』第14号、国文学研究資料館、2018年、p.43-60。

サブ・シリーズを設定した⁸⁾。

「原稿」には、手描きの原画やドローイング、色指定紙、コラージュ用のコピー資料といった制作資料が含まれているが、下位のシリーズはあえて設定していない。調査研究や展覧会出品など利用の観点から考えれば、横尾の手描き資料か否かという点が重要であり、横尾館では、原稿資料のうち手描きの資料を「原画」と呼称している。これらは使用頻度や検索頻度が高く、機能別の下位シリーズで整理したいところだが、どこまでが手描きかという選別は極めて曖昧で明確な基準はなく、調査担当者や入力者によって判断のズレが生じてしまう。明らかに第三者のものと思われる書き込みも数多く見受けられるため、こうした不明瞭な分類を編成に反映させることは現段階では避けることとする。

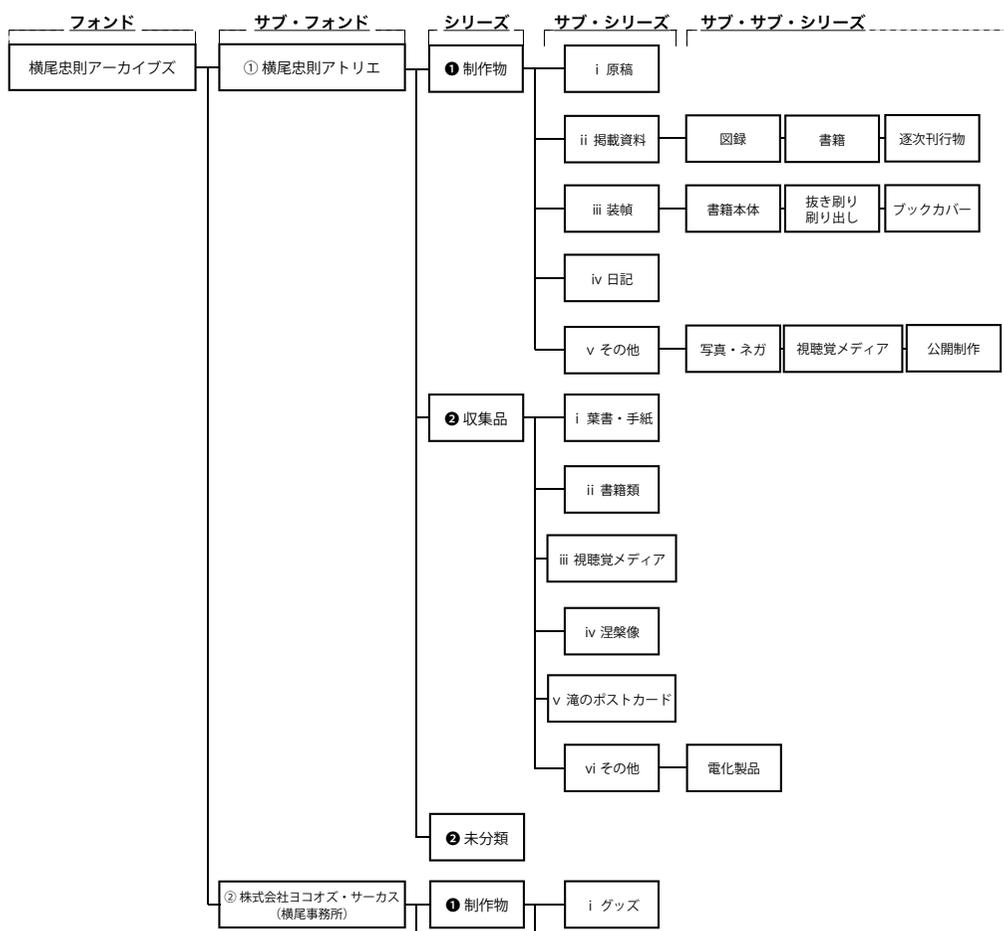


図1 横尾忠則アーカイブズの編成案

8) 藤本前掲論文、p.68-69。本稿ではサブ・サブ・シリーズおよびファイルにおいて、物理的区分を考慮した機能による分類を行ったが、藤本氏の「物理的区分を考慮した内容による分類」というシリーズ設定の方針を参照している。

「掲載資料」は横尾関連資料のみに限定し⁹⁾、それ以外の蔵書は「収集品」として区分する。ただし、「収集品」内にはコラージュなどに使用する目的で収集されたと思われる資料も混在しているため、制作物との関連が明確な場合は、機能的コンテキストとして情報を追記していく必要がある。「写真・ネガ」には、コラージュ用の制作資料と、家族旅行の写真などの私的な資料が混在しているが、横尾が被写体となっているものや周辺資料から横尾が撮影したと推察できるものが多いことから、「制作物」の下位に設定した。

結果として、サブ・シリーズ以下のレベルでは機能・形態・主題別の区分が並列することとなったが、前述したように物理的区分による分類が上位レベルで設定できない以上、各要素を柔軟に組み合わせる必要があり¹⁰⁾、本節1項で追加した「形態」の記述を統制できれば、サブ・サブ・シリーズとして設定することも可能だろう。各サブ・サブ・シリーズの下位には、必要に応じて封筒やスクラップブックのまとまりをファイルとして設定することを想定している。

また、階層構造では表現できない、単一のアイテムが様々なプロジェクトに流用されていく複雑な関係性の記述に対しては、シリーズ・システムの部分的な適用も有効であると考えられる。作品名(ポスター作品や絵画作品、プロダクトのシリーズ名など)をシリーズに設定することで、作成者(エージェンシー)と各プロジェクトの関係性を記述することが可能となる。横尾は、瀬戸内寂聴氏やイッセイミヤケ氏といった特定の人物と共作を重ねており、エージェンシーに関係者や出版社を並列すれば、掲載資料を含めた多くの関係性を記述できると期待される。本来シリーズ・システムが意図している「組織」の定義からは外れるかもしれない¹¹⁾、アイテム単位の記述を基準としている場合にはメリットもあると考えられる。しかし、必ずしも「作成者」が明らかでない資料を多く含む当アーカイブズにおいては、効力が十分に発揮できるとは思われない。資料群における「関連性」を重視するのであれば、作成者との関連より、資料同士の関係性に重点を置く方が横尾忠則アーカイブズの群としての特質を表現できるだろう。

3. 多角的検索手段の整備に向けた試論

(1) タグ・システムを応用した検索システムの検討

現段階での編成を試みた結果として、階層構造の編成は資料群の全体像の把握には有効だが、体系的な構造分析が実現できているかは疑問が残ると同時に、当アーカイブズの特徴を表すことは難しいと思われる。横尾の場合、政治家や商家などの個人アーカイブズにおいて、シリーズとして想定しうるような「役職」が存在せず、「デザイナー」や「画家」「作家」といった社会的立場はあるものの、それぞれの肩書と作品(制作物)は複雑に結びつき、その境界は明確に線引きされていない。画家に転向した後もデザイナーとしての仕事を受け、執筆活動も同時に行っているため、業務を年代で区分することは難しく、むしろ職業カテゴリーに囚われ

-
- 9) 奥野前掲論文、p.50。奥野氏は、機能である「装幀」「掲載誌」が、形態である「図録」と同じ階層であることを疑問視しており、「掲載誌」の記述も「掲載資料」とすべきであると指摘している。
- 10) 加藤聖文「近代個人文書の特性と編成記述—可変的なシリーズ設定のあり方—」『アーカイブズの構造認識と編成記述(オンデマンド版)』国文学研究資料館、2017年、p.181-198。
- 11) 森本祥子「アーカイブズ編成・記述の原則再考—シリーズ・システムの理解から—」『アーカイブズの構造認識と編成記述(オンデマンド版)』国文学研究資料館、2017年、p.71-96。

ない創作活動こそが横尾芸術の大きな特徴であり、まさしく横尾忠則アーカイブズの特徴でもある¹²⁾。本項では、横尾忠則アーカイブズの内的構造を表現しつつ多角的検索手段としても応用できる編成方法について検討したい。

試論として、アート・アーカイブズのデータベース構築における先行例である、多摩美術大学のタグ・システム¹³⁾を参照し、擬似的に模倣する。当該のシステムは作品に関連するメタデータをタグ（＝属性情報）という形で付与し、検索システムにも活用している¹⁴⁾。横尾館においては、アイテム単位の検索性の向上だけでなく、当アーカイブズの性質を可視化する手段としても応用できると思われる。

まず、内容目録の項目を一部抜粋し、アイテム単位の記述をタグ化する作業を行ったが、本試論のために、編成案のサブ・（サブ・）シリーズを「分類名称」として項目だて、タグ化できる属性情報の一部を「備考」欄に羅列した。データベースの公開に際しては、各項目を詳細に記述し、文中の単語にリンクを付与する形も考えられるが、いずれの表示形式にせよ、検索者の利便性を十分に考慮する必要があるだろう。

表3 内容目録と属性情報のタグ化の検討例

管理番号	タイトル	出版年（制作年）	資料区分
0055-0002	話の特集 昭和41年7月号	1966	掲載誌
0473-0043	話の特集 昭和41年7月号（原画）	c.1966	原稿
0531-0001	細江英公『薔薇刑 新輯版』（集英社）	1971	装幀
0055-0004	話の特集 昭和41年11月号	1966	掲載誌
—	KEN TAKAKURA（原画）	1978	原稿

分類名称	掲載記事タイトル	備考（内容記述・関連情報の抜粋）
逐次刊行物	人物戯論 三島由紀夫	高橋睦郎／三島由紀夫
原稿	—	三島由紀夫／トレーシングペーパー
書籍本体	—	三島由紀夫／GENKYO 横尾忠則展（貸出）
逐次刊行物	人物戯論 高倉健	高橋睦郎／高倉健
原稿	—	高倉健／KEN TAKAKURA（ポスター）

表3では、一例として、1965（昭和40）年創刊の雑誌『話の特集』に関連する資料を一部抜粋した。『話の特集』は、横尾が創刊から1970年代頃までの黎明期に表紙と「人物戯論」のイラストレーションを担当した娯楽雑誌である。

『話の特集 昭和41年11月号』に掲載されたイラストレーションは、高倉健がモデルであった。同じく高倉をモデルとした資料として、ポスター作品の原画である《KEN TAKAKURA

12) 飯田高誉「横尾忠則の「昭和NIPPON」—反復 連鎖 転移」『横尾忠則の「昭和NIPPON」—反復・連鎖・転移』、横尾忠則現代美術館、2013年、p.6-13。飯田氏は、横尾の枠に囚われないイメージの転移について、次のように論じている。「横尾忠則のすべての作品は、イメージの反復から連鎖へ、そして転移していく有様が認められる。（中略）時間軸を横断したり、グラフィック・ワークや絵画といった表現メディアをも超えた位相空間が作品の至る所に偏在し、さらに一つの作品イメージから他の作品イメージの反響音が重層的に聞こえてくるのである」。

13) 佐賀一郎「デザイン系アーカイブの連携をめざして—タンギング・システムの可能性」『軌跡 no.2, March 2021』多摩美術大学アートアーカイブセンター、2021年、p.9-16。

14) 佐賀一郎「竹尾ポスターコレクション・データベースと探索的アーカイビング」『軌跡 no.1, Spring 2020』多摩美術大学アートアーカイブセンター、2020年、p.43-49。

(原画)》が登録されているが、現状、後者のデータベース項目に「高倉健」の記述はなく、漢字で人物名を検索した場合、前者は抽出されるが後者は検索されない。当該の原画資料が高倉関連の資料であることは明白であり、目にする機会の多いイメージのため、横尾館の学芸員にとっては大きな問題にならないが、メタデータの不足と記述統制は今後データベースを展開する上でも課題となるだろう。現在でも項目外の情報は「備考」欄に記述しているが、タグとしてメタデータを選択・付与できるシステムは、記述作業の効率化にもつながり、前節でも述べたような資料の機能認識の困難さなど、タグの語彙を柔軟に統合・追加することで克服できる問題は多いと考える。

また、同年7月号には、三島由紀夫のイラストレーションが掲載されている。本誌および当該イラストレーションの原画資料、原画に付随するトレーシングペーパーは、一つのイラストレーションに紐付く関連資料である。一方、細江英公が三島をモデルとして撮影し横尾が装幀・装画を担当した写真集『薔薇刑 新輯版』も、同様に三島関連の資料であり、前者2点と『薔薇刑』は直接的な関連を持たないものの、横尾の仕事の中で「三島由紀夫」を起点として関連づけることができる。このように、「三島由紀夫」のキーワードをタグとして追加することで、各資料の共通項を端的に集約し、群内部での位置づけを明確にすることが可能となる。

表3の情報について、タグが結びつける「関係性」を軸に、資料の位置関係を相関図形式に置き換えると図2のような形が想定できる。各タグの周辺に関連する資料がマッピングされることで、リストからは読み取りにくい資料の位置関係が視覚化される。「関係性」の網目状の広がり、階層構造とは違った形で横尾忠則アーカイブズの内的構造を表現できる可能性があるのではないだろうか。また、タグの用語解説や分類表、タグ自体の階層構造のような補助ツールを整備すれば、関連情報を簡潔に整理することにもつながっていく。加えて、表3の『薔薇刑』には、館外貸出の履歴を展覧会名としてタグ付けしたが、資料発生後に加わったコンテキスト記述を簡便に行うことができれば、資料群の中でアイテム同士を関連づけるだけでなく、関連作品や刊行物、館外の外部情報といったより膨大な情報と紐付けられ、さらに大きな枠組みで

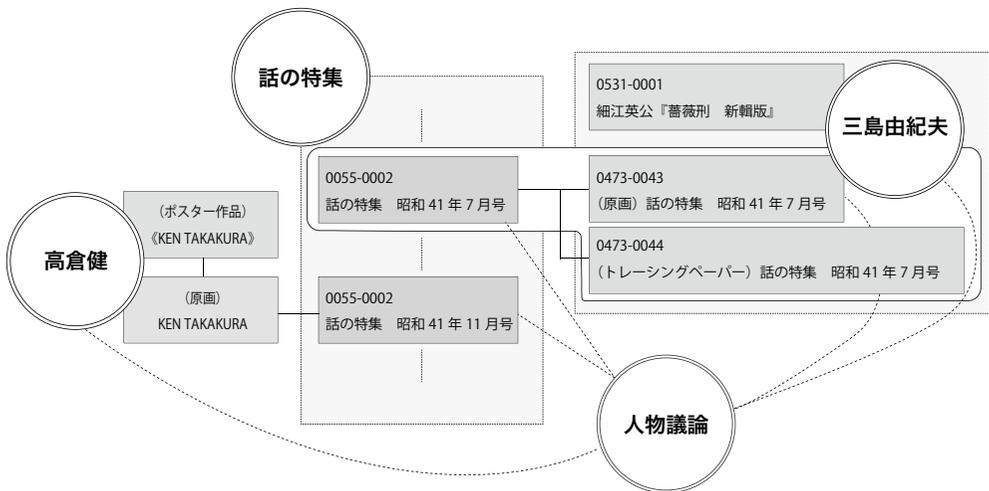


図2 タグを中心とした相関図案

の情報の集約化にも活用できるだろう。

また、情報の集約という点では、現行のデータベースにも出品歴などを記載しているが、とくに組織アーカイブとの連携は今後の大きな課題である。美術館の組織アーカイブについては川口雅子氏が指摘しているように、「美術館自体が記録資料を生み出す現場」であり、美術館で生み出される記録資料とは作品や資料に関するものが多くを占めるのであって、収集アーカイブと深く関連しているのは必然である¹⁵⁾。とくに学芸課に関連する組織アーカイブは個人文書の性格が強く、行政文書の整理方法には馴染まないと思われるため、大学文書の収集アーカイブズおよび組織アーカイブズの編成などを参考にしながら、整理方法を検討していく必要がある¹⁶⁾。

（2）現代美術館におけるアーカイブズ資料の展望

冒頭で述べた、収集と現用／非現用の問題に関する特徴によって、横尾忠則アーカイブズの内部構造は複雑に変化し続けているが、将来的に収集が完了し調査を進めていくことで、資料同士の関連はいずれ整理できるだろう。同様に、資料群の外部情報との繋がりも研究が待たれるが、とりわけ作品と資料の関係性をめぐる問題は、横尾館だけでなく、収集アーカイブズを保管する美術館に共通する課題ではないだろうか。

美術館が所蔵するアーカイブズの多くは、制作物（作品）に関する資料であり、作品に付随する副次的なものとして位置づけられる傾向が強い。これは、美術館の組織としての機能そのものが作品を基盤としていることに由来する。現代の美術館に求められる社会的役割は第一に展覧会の開催にあり、とくに新型コロナウイルスの騒動が発生する前までは、展覧会の比重はますます重くなる一方で、展覧会の中心となる作品があらゆる面で優先されることは組織の性質上自然な流れであるといえる。横尾館でも、資料群単位より資料単体や単一資料の特定箇所を抽出し、作品との関連で語る機会の方が多く、本稿で検討してきたアイテム単位のメタデータの充実による検索性の向上や、階層構造以外の形式で内的構造を分析する作業も、作品と並列する形で資料を物理的かつ個別に「活用」することを前提とした、美術館の収集アーカイブズへのニーズに応えるためのものであった。しかし、単一のアイテムを資料群から抜き出すことで、「作品の付属物」という側面のみが過剰に強調されれば、「群」としてのまとまりや内部構造はより一層見えにくく不明瞭になる。美術館の収集アーカイブズを扱う場合には、この点に自覚的であるべきだろう。谷口英理氏は、美術館におけるアーカイブズ形成の障害として「アイテム至上主義的な思考」¹⁷⁾をあげているが、とくに横尾館のように、存命作家あるいは作家

15) 川口雅子「美術館におけるアーカイブの位置と可能性」〈<https://www.bijutsushi.jp/bujutsu-hakubutsu-iinkai/07-4-21-symposium-kawaguchi.pdf>〉（最終アクセス日：2021年8月24日）。

16) 清水善仁「組織体の機能構造とアーカイブズ編成—大学アーカイブズを中心に—」『アーカイブズの構造認識と編成記述（オンデマンド版）』国文学研究資料館、2017年、p.201-225。清水氏は「大原則として出所が異なるため、同一構造内の同一シリーズに組み込むことはできないが、記述の面では内容的に関係する複数のデータをつなぎあわせる工夫はいくらでもできる」と指摘しており、本稿の試みも同様の考えに基づくものであるが、ISAD(G)の「3.5.3関連資料」の項目には当てはまらない雑多な情報を処理する目的がある。

17) 谷口英理「収集アーカイブズと戦後美術関係資料—日本の美術館の現状をめぐって—」『REARno.39 [リア]』リア制作室、2017年、p.40-44。

の活動中にアーカイブ資料の収集が開始されるような場合には、収集と個別調査が同時に進行し全体像の把握が最終段階で行われるといった、従来のアーカイブズの調査手法に逆行せざるを得ない状況が生じる。これによりアーカイブ資料群全体を俯瞰する視点が見落とされやすくなる点には十分に留意すべきである。

当アーカイブズは、今後も調査・整理、公開に至る各プロセスを進展させていくが、横尾の創作活動や横尾自身を紐解くツールとしての側面と、膨大な物量が集積された個人文書群としての側面、両者の重要性を意識しながら、美術館のアート・アーカイブズだからこそ実現できる新たな情報提供の形を提示できるよう努めていきたい。

おわりに

本稿では、階層構造による編成を行いつつ、当アーカイブズが持つ性質の新たな提示方法について検証した。存命の現代アーティストとの特殊な関係の中で成立している当館においては、アーカイブズもまたイレギュラーな対応を求められる場面が少なからずあるが、構造分析および編成記述に先行して、アイテム単位での目録整理と公開を進めてきた経緯を踏まえ、整理方針の変更は検討されていない。将来的に収集が完了した際には、編成記述と情報公開のあり方を再度本格的に検討することになると思われるが、その時に備えて、現行の整理作業と情報収集を継続しつつ、現代アーティストが形作るアート・アーカイブズの混沌とした内的構造を、資料群の「特性」として適切に表現／公開できる方法を模索していきたい。

謝辞

本稿は、令和2年度アーカイブズ・カレッジ（短期コース）修了論文「現代美術アート・アーカイブズの構造分析に関する考察—横尾忠則現代美術館の事例—」を基に大幅な修正、加筆を行ったものです。新型コロナウイルスの影響で長期コースの実施が見送られた中、本研修はオンライン受講の併用や感染症予防を徹底した上で開催いただきました。本稿の執筆に当たっては、国文学研究資料館の先生方にご指導を賜り、職員の皆様には、研修中だけでなく実施前後にも多大なご苦勞があったことと拝察します。この場を借りて厚く御礼申し上げます。